国文祭 芸文祭 みやざき2020

KPP キッズプレスプロジェクト

2020年秋に本県で初開催される「国民文化祭(国文祭)、全国障害者芸術・文化祭(芸文祭)みやざき2020」。国内最大の文化の祭典を盛り上げようと、県内の小中高生記者による取材活動から地元文化の再発見を行うのが「キッズプレスプロジェクト(Kids Press Project=KPP)」(県実行委、宮崎日日新聞社など主催)です。宮日こども新聞では、小中学生のこども記者21人が取材した記事を紹介します。

演劇の魅力は「出会い」

劇団こふく劇場（都城市）

都城市を拠点に、全国で活動中の劇団こふく劇場。演劇の魅力や公演にかける思いを知りたくて、取材をさせてもらった。

代表の永山智行さんは劇の魅力は『出会い』だという。「お金では買えない、いつ出会うかもわからない。一期一会。また、劇には正解があるものが少ない。人それぞれの楽しみ方があるのも魅力」と話す。

公演への思いも聞いた。見る人に、立ち止まっていろんなことを感じてもらったり、日常をゆっくり振り返ったりしてほしいそうだ。

生演奏使い「ワクワク感」

生演奏を使っている理由も尋ねると、今、そこで何かが生まれている感じにワクワク・ドキドキするからだという。確かにスピーカーから流される音と違い、生演奏が会場全体を包み込む感じが心地よかった。

団員のあべゆうさん、かみもと千春さんには普段意識していることを聞いた。食生活や体づくりだそうだ。前日に食べた物や飲んだ物で声が変わることがあるそうだ。役に合った声のつくり方も聞いた。すると驚く答えが返ってきた。「つくるのではなく、台本から感じたイメージを声で表している。つまり、体から自然に出てきた声がその役にあった声」なのだそうだ。

最後に永山さんに大変なことは何か聞いた。「大変なことも全部楽しいことにするというスタンス。これからも演劇の良さを発信したい」と笑顔で話されていた。劇を作る人が楽しんでいるからこそ、私が見た公演「キャベツくん」も楽しい劇だったことが分かった。

（福島妃夏）

①公演「キャベツくん」を前に、リハーサルで動きを確認する団員ら②代表の永山智行さん（左奥）をはじめ、皆さんはとても仲良し③生演奏の練習の様子＝宮崎市・メディキット県民文化センター（福島妃夏撮影）

次回は14日付

宮日こども新聞 MIYANICHI KODOMO　いざ神話の源流へ

キッズプレスプロジェクト

こども記者　福島　妃夏（14）

宮崎市・生目中２年

取材後記

休憩時間に劇団の皆さんと一緒にカレーを食べた。野菜がたくさん入っていて、とてもおいしかった。使われている野菜は「やさい割」で集まったものだ。見に来た人が家庭で収穫した野菜を持ってくると、何と、入場料が割り引きされるというものだ。皆さんは仲が良く、一人一人がいきいきしていて、この、雰囲気の良さが素晴らしい劇作りにつながっているんだなぁと実感した。

劇団こふく劇場は県内の小・中学校や全国各地でも公演を行っている。ぜひ私の通っている生目中にも来てほしい。

私は小学生の時、演劇クラブに入っていた。今回の取材であらためて劇の面白さを感じた。ぜひ多くの人に劇団こふく劇場の公演を鑑賞してほしい。そして、いつか私も劇団こふく劇場の一員になり、演劇の良さをみんなに知ってもらいたい。

取材の様子

同行記者ひとこと

リハーサルを見学後、楽屋を訪れ団員とカレーを食べ始めた福島さん。そこで俳優から聞き出した言葉もしっかり記事にしています。心を動かして取材していたことが文章に表れていてうれしくなりました。

（生活文化部・中川美香）